

ヴェネツィアの絵画と音楽

松葉良

イタリー・ルネッサンスのヴェネツィア派絵画は特にその色彩と詩情の面に秀れている。なぜこれほどの色彩の多様性と情感の深い名作の数々が生みだされたのであろうか。

アドリア海に面した小さい島であるヴェネツィア、その自然的環境それ自体が極めて絵画的であったということに全てがかかっているともいえる。一面にたちこめる水蒸気と陽の光そして水の青さ、それは無数の輝くような色彩となってハーモニーし、その色彩はお互いに反映しあっている。この光景を常に眺めていたその時代のヴェネツィア人の美的感覚がますます高度になつたのは当然かも知れない。

ルネッサンス時代のヴェネツィアの社会

的環境はどのようなものであつたらうか。

ヴェネツィアはイタリー各地の都市の中で長い間中世の政治的闘争から孤立していった。また彼らの教会もローマ教会から独立し、自由な息吹きの中にギリシャの神話とキリスト教が合致して一つの新しい信仰を作りあげていたのである。確かにその当時のフィレンツェの文化が極めて理智的であったのに反してヴェネツィアの文化は官能的とさえいえる位感性的なものであった。

このような歴史的風土の中で創造された美術と音楽について考えて見よう。

ジョヴァンニ・ベルリーニは十五世紀ヴェネツィアの絵画を決定的に確立した天才であった。彼の絵画の独自性は色彩に全てがあるといえよう。輝くような彼の作品の

数々は驚くほど鋭い感覚と構成によつてその後のヴェネツィアの方向を決定的なものとしたのである。晩年のベルリーニの影響を受けてヴェネツィアの絵画を大成したのがジョルジョーネである。彼は惜しくもヴェネツィアでベストにかかり三十三才で夭逝している。しかし彼の生涯については不明の点が多い。

ジョルジョーネは偉大な画家であるだけではなく優れた詩人であり、またその当時におけるリュートの名演奏家であつたといふことが伝えられている。しかし彼の演奏した音がどのようなものであつたかは失われた時の中に消え去つたとしても、ルーヴェルにある「田園の合奏」を眺めた時、その画面の中に彼の音楽が生き続けているのではないかと強烈な印象を受けたのである。彼の代表作であつたヴェネツィア商人館の外側に描いたといわれるフレスコ画は十六世紀に嵐で破壊されてしまつてゐる。確かに彼の作品の中で残されたものは極めて少ない。

それらも彼が描いたかどうかという点に關していろいろと意見が分かれてゐる。そ

れ故現在彼の直筆が何点残されているかは三十点以下最小四、五点という諸説が入り混っている。しかし彼の作品はヴェネツィア絵画の随一のものであり珠玉のような光芒を放っている。彼がヴェネツィア人であったためだろうか、色彩の明度という問題を僅かな生涯をかけて徹底的に追求したのである。

またジョルジョーネはヴェネツィアの画家たちの間では孤立してその時代の文人並びに音楽家たちと深い交際をしていたと伝えられているが、そのことが彼の精神面に大きな影響を与えたことは事実であろう。ジョルジョーネの最高の作品である「田園の合奏」に対してもティツィアーノとの合作ではないかという説もある。しかし色彩の明度という問題即ちヴァルールに関してはティツィアーノとは全然異質のものであり、この絵画に描かれた情景は陽光と大気が感じられるヴェネツィアの風土そのものである。

またジョルジョーネの「奏楽」の画面においても演奏者の顔と牛の表情に音楽それ自体が聴えてくるような純粹な情感が感じ

られる。

ティツィアーノはジョルジョーネと同じようにベルリーニの同門であったが、長命であったため、その影響力はヴェネツィアだけではなく中部イタリアにまで拡がっていった。

彼はジョルジョーネの求めた世界とは本質的に異なるが、ヴェネツィア派の極めて華麗な色彩画家としてのその技法はすぐれている。

しかし彼の性格は彼の画面と異って世俗的な野心家であり、そしてまた権力に対する野望など、余りにも矛盾したものを持っている。合わせていたと伝えられている。しかし一面音楽を愛する教養人でもあった。そして彼の動的なリズム感後のバロック美術の基礎を作りだしたとも言える。

ティツィアーノの弟子であるティントレットはミケランジェロの線とティツィアーノの色彩を光による明暗の対比によって綜合しようとしたヴェネツィア派絵画の最後の偉大な画家の一人であった。

一方音楽においてヴェネツィア楽派の表現した世界はやはり絵画の世界に通じるも

のでありヴェネツィアの風土と環境なしには存在しないものであるといえる。

確かにヴェネツィア楽派はサン・マルコ寺院を中心とするフランドルとイタリアの楽派であるが、この楽派の持つ一つの理想は、極めて劇的な要素を持ち器楽音楽の盛大さによって絵画と同じように色彩感の勝れた音楽を創造するところにあったといえるだろう。

特にアルビノーニやマルチェロなどに感じられる極めて官能的ともいえる甘美な音楽はヴェネツィア絵画と同じように、ヴェネツィアの風土そのものとその色彩の持つ微妙な変化を強く感じさせてくれる。

このようにヴェネツィアの絵画と音楽を考える時、それはルネッサンスとバロック的なものを内部に包含しながらヴェネツィアでなければ成立しない芸術の在り方を強く感じてしまうのである。

特にジョルジョーネの絵画を見た時、トーマス・マンの「ヴェニスに死す」を思いおこすのもヴェネツィアの風土に寄せる強烈な郷愁とも言えるものではないだろうか。